

<b>Title</b>	シェイクスピアにおける CAN および BE ABLE TO について
<b>Author(s)</b>	寺田, 正義
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 10(1) : 95-112
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=620">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=620</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# シェイクスピアにおける CAN および BE ABLE TO について

寺 田 正 義

## CAN and BE ABLE TO in Shakespeare

Masayoshi TERADA

This study analyzes occurrences of CAN and BE ABLE TO in Shakespeare's works in the hope of discovering some characteristics of spoken Early Modern English. In order to clarify the differences, this study compares uses of CAN and BE ABLE TO in Shakespeare's works with those in the Authorized Version (AV) of the Bible, which may safely be said to represent the written English at that time. As I suggested in "BE ABLE TO in the Authorized Version of the Bible" (1995), BE ABLE TO is generally used as a supplemental form of CAN. That is to say, BE ABLE TO supplies the forms which CAN cannot provide, or it is used to satisfy requirements of rhythm and sentence balance, for the sake of euphony, and for other stylistic reasons. Many examples of these uses are found in the AV, but there are also interesting uses of BE ABLE TO that seem unique to the AV. In Shakespeare's works far fewer examples of BE ABLE TO are found and the uses of BE ABLE TO are a little different from those in the AV. This study deals with the problem from three points of view: statistical, syntactic and semantic.

### 1. はじめに

初期近代英語に留まらず、英語そのものの確立に貢献した双璧は欽定訳聖書とシェイクスピアであることに異論はないであろう。欽定訳聖書は当時の文語体を代表し、また、それは複数の学者たちの訳業である。それに対して、シェイクスピアの場合は、その大部分の作品が戯曲であることから、当時の口語そのもの、あるいは口語に極めて近いことばで作品が書かれていると判断して間違いないであろうから、当時の口語体を代表している、と言っても決して言い過ぎではないだろう。しかも大部分は個人の業績である<sup>(1)</sup>。したがって同時代の業績ではあっても、語彙のみならず、文の構造においても両者を際立たせる相違があってもおかしくはないだろう。それは、法助動詞の使

---

**Key words;** Shakespeare, Can, Be Able To

用についても言えるのではないだろうか。本論文では、法助動詞のうち CAN および BE ABLE TO の使用に焦点を当てて、統計、統語論、意味論の3つの観点から両者の比較を試みる。シェイクスピアについては *Sonnets* を除いた全作品を調査した<sup>(2)</sup>。

欽定訳聖書については、TERADA (1995) において BE ABLE TO を中心にした研究を試みた。その中で明らかにできた主な点は以下の通りである。

- (i) 欽定訳聖書においては、CAN (372例) と BE ABLE TO (115例) との比率は約 3 : 1 である。これは聖書の現代語訳である *The New English Bible* の場合の比率が CAN (740例) : BE ABLE TO (71例) = 10 : 1 であるのに比べて欽定訳聖書における BE ABLE TO の割合が極めて高いことを示している。
  - (ii) 欽定訳聖書においては、BE ABLE TO の全用例のうち単純現在形と単純過去形を合わせたものの割合は67%である。このことは BE ABLE TO が CAN の代用形として用いられているというよりは、独自の意味用法を持っていたためであると解釈できる。
  - (iii) 欽定訳聖書においては、BE ABLE TO の多くが 'have the divine power' の意味を持っている。特に単純現在形にそれが顕著である。この傾向は、*The New English Bible* でも引き継がれてはいるが、同様な意味を持った他の形に言い換えられている場合が多い。
  - (iv) 欽定訳聖書において CAN BE ABLE TO が 1 回用いられている。
- (1) And they (i. e., locusts) shall cover the face of the earth, that one cannot be able to see the earth (Exod. 10 : 5) (いなごが地の表をおおい、地は見えなくなる<sup>(3)</sup>)

従来これは tautological であると考えられてきたが、この場合の CAN は 'it is possible that' という意味を持ち、さらに、BE ABLE TO は 'one has sufficient power or ability' という意味を持つものと考えられる。もし、tautological であるとした場合には、厳密に言えば非文法的であるこの形が、文語の代表とも言える欽定訳聖書にたとえ1度にしても登場するのは腑に落ちない。

網羅的な研究で知られている Visser (1963-73 : 1738) はこのタイプの用例を8つ挙げているが、いずれも否定辞または疑問詞と共起したものであるのは興味深い。上記の(1)は Visser は挙げていないが、これも否定辞と共起している。Visser は、意味については、現代英語では tautological な印象を与えるであろう、と述べているだけでそれ以上の言及は避けている。

## 2. 統計的考察

表1および表2は、シェイクスピアの作品を推定著作年代順に並べて CAN および BE ABLE

シェイクスピアにおける CAN および BE ABLE TO について

表1：シェイクスピアの各作品における CAN の分布

	Date	Simple Present	Simple Past	Hypothetical COULD	Hypothetical COULD+HAVE+EN	Total
2H6	1590-1	52	4	4	1	61
3H6	1590-2	41	2	5	0	48
Err	1591	13	6	3	1	23
GV	1591-2	50	4	2	1	57
1H6	1592	21	3	7	0	31
Ven	1592	16	3	2	0	21
R3	1593	49	4	2	2	57
TA	1593	26	1	3	1	31
LLL	1593-4	28	0	3	0	31
TShr	1594	25	3	3	0	31
Lucr	1594	17	6	4	0	27
MND	1594-5	32	3	5	0	40
RJ	1594-5	47	7	4	2	60
R2	1595	26	1	3	0	30
MV	1595-6	41	2	6	0	49
John	1595-6	32	4	10	0	46
1H4	1595-6	30	5	7	1	43
2H4	1597	42	8	1	1	52
MWW	1598	27	3	7	3	40
H5	1598	33	2	8	1	44
Ado	1599	39	2	11	1	53
JC	1599	21	9	4	0	34
As	1599	35	1	15	1	52
TN	1601	35	3	3	1	42
TCr	1601-2	24	5	4	1	34
All	1602	43	9	4	2	58
Ham	1602-3	45	6	20	0	71
MM	1603	30	1	6	0	37
Oth	1604	39	3	6	0	48
Tim	1604	33	6	4	1	44
Lr	1605-6	44	3	9	0	56
Mac	1606	28	6	6	0	40
AC	1606	35	5	5	0	45
Per	1608	58	3	4	0	65
Cor	1609	57	10	13	3	83
Cym	1610	49	9	4	2	64
WT	1611	41	4	8	2	55
Temp	1611	29	9	5	0	43
H8	1613	35	7	4	1	47
TNK	1613	38	2	14	3	57
Total		1406	174	238	32	1850

シェイクスピアにおける CAN および BE ABLE TO について

表 2：シェイクスピアの各作品における BE ABLE TO の分布

	Simple Present	Simple Past	Hypothetical Past	With Modals	Non-finite Forms	Total
2H6	3	1	0	1	0	5
3H6	0	0	0	1	1	2
GV	1	0	0	0	0	1
1H6	2	0	0	0	0	2
TA	1	0	0	0	0	1
TShr	1	0	0	0	0	1
MND	1	0	0	0	0	1
R2	0	0	0	0	1	1
MV	1	0	0	0	0	1
2H4	1	0	0	0	0	1
MWW	2	0	0	0	0	2
H5	0	0	1	0	0	1
All	1	0	0	0	0	1
AC	0	0	0	1	0	1
Per	1	0	0	0	0	1
Cor	1	0	0	0	0	1
WT	0	0	0	1	0	1
TNK	0	0	0	0	1	1
Total	16	1	1	4	3	25

表 3：欽定訳聖書における CAN の分布 (Terada(1995)より)

Simple Present	Simple Past	Hypothetical COULD	Hypothetical COULD+HAVE+EN	Total
271	91	7	3	372

表 4：欽定訳聖書における BE ABLE TO の分布

(Terada(1995)より)

Simple Present	Simple Past	With Modals	Non-finite Forms	Total
46	31	25	13	115

TO の分布を示したものである<sup>(4)</sup>。BE ABLE TO については、出現ゼロの作品は載せていない。表 3 および表 4 は欽定訳聖書において CAN および BE ABLE TO の分布を示したものである<sup>(5)</sup>。

上記の表から、以下に述べるようなことが読み取れるであろう。

- (i) シェイクスピアにおける CAN および BE ABLE TO の分布は著作年代によって著しく増減するというような傾向は見られない。作品間の CAN および BE ABLE TO の多寡は、作品の長さや作品の内容に依存しているものと判断できる。
- (ii) シェイクスピアにおける CAN と BE ABLE TO の比率は77：1である。これに対して欽定訳聖書の場合は3：1であり、シェイクスピアにおいては、CAN が実数においても、比率においても圧倒的に多いことがわかる。このことを、既に述べたようにシェイクスピアの作品が当時の口語を代表し、欽定訳聖書が当時の文語を代表しているのではないかという推測と重ね合わせてみると、特に、単純現在形および単純過去形の BE ABLE TO はどちらかという文語的なスタイルで比較的良好に用いられたのではないかという推測が成り立つ<sup>(6)</sup>。
- (iii) CAN BE ABLE TO はシェイクスピアにおいては WT 52024 および AC 14078 に2回使われている<sup>(7)</sup>。それに対して欽定訳聖書では既述のように1回使われている。
- (iv) 仮定法の COULD の出現率は、欽定訳聖書では COULD 全体の9.9%であるのに対してシェイクスピアでは60.8%と非常に高い率である。
- (v) BE ABLE TO の実数については、シェイクスピアと欽定訳聖書とは大きな隔りがあるものの、BE ABLE TO 全体に対する単純現在形と単純過去形を合わせたものの比率はシェイクスピアが72.0%、欽定訳聖書が67.0%で類似した傾向を示しているし、どちらも高い比率を示しており、CAN とは別の意味領域を持っていることをうかがわせている。

### 3. 統語論的考察

#### 3.1. CAN について

ここでは、現代英語ではほとんどその用例を見ることのないものを挙げてみることにする。

##### 3.1.1. 単純現在形および単純過去形

単純現在形と単純過去形との間に統語論的な相違は認められないので、一括して検討する。

##### 3.1.1.1. 本動詞の省略

本動詞のないものが数例ある。欽定訳聖書には、この用法は見当たらない。

- (2) And they can well on horseback. (Ham 47070) (あの連中の馬術は大したものだ<sup>(8)</sup>)
- (3) Ay me, I can no more. (2H6 32120) (ああ、私はもうだめだ)
- (4) She never could away with me. (2H4 32197) (彼女はわたしのことだけはがまんできかないということだった)

3.1.1.2. It cannot be

「ありえない」という不可能の意味を持つ表現として It cannot be が多用されている。現われ方としては、単独で用いられる場合と that 節を従える場合とがある。欽定訳聖書には、この用法は見当らない。

- (5) It cannot be: some villains of my court are of consent and sufferance in this (As 22002) (そんなことはありえない。この宮廷の下郎のなかに承知で見逃したものがいるにちがいない)
- (6) It cannot be this weak and writhled shrimp should strike such terror to his enemies. (1H6 23022) (こんな弱々しい、しなびた小えびみみたいな男がその敵を恐怖でおののかせるなんてありえない)
- (7) It cannot be that she hath done the wrong. (Err 51136) (彼女が不正を働くななんてありえない)
- (8) for't cannot be we shall remain in friendship, our conditions so diff'ring in their acts. (AC 22117) (というのは我々の性格が非常に違った形で表に現われるから、きみとぼくとは長くはうまくやっていけないだろう)

3.1.2. 仮定法の COULD

すでに統計的な考察で述べたように、仮定法の COULD の出現率は欽定訳聖書に比べて非常に高い。一般に、エリザベス朝では、仮定法は衰退の時期にあったとされているが<sup>(9)</sup>、シェイクスピアにおいては多用されていたことがわかる、意味論的な考察はあとで行うので、ここでは、仮定法の COULD はシェイクスピアの場合、会話に陰影を与え、また、活気を与えるのに貢献しているように思われるということだけを指摘しておく。

仮定法は、条件節を備えた、いわば、完全な形のものばかりでなく、現代英語ではほとんど見ることのできない願望を表す主節 I would などに続く名詞節の中で用いられ、非現実の意味を表す O, ~! のような構文で多用されている。また、現代英語ではまれである unless ~ でも仮定法が用いられている。これらは、仮定法過去と仮定法過去完了に共通に見られる傾向であるので、ここでは一括して扱うことにする。

3.1.2.1. 条件節の中で

- (9) If your grace could but be brought to know our ends are honest, you'd feel more comfort. (H8 31152) (私どもの善意がおわかりいただけさえすれば、少しはお心も安らぐことでしょうが)
- (10) If I could ha' remembered a gilt counterfeit, thou wouldst not have slipped out of my con-

templation; (TCr 23023) (にせ金のことを思い出していたら、金メッキ野郎のおまえのことを忘れやしなかったんだがなあ)

- (11) Hadst thou been his mother, thou couldst have better told (2H6 21082) (おまえがあれの母親であったなら、もっと上手に話せたのに)

### 3.1.2.2. 名詞節の中で

- (12) Would all other women could speak this with as free a soul as I do. (H8 31030) (ああ、あらゆる女が私のように曇りなき心をもってこのことばを言えたらいいのだけど)

- (13) And yet methinks I could be well content to be mine own attorney in this case. (1HVI 55120) (とは言え、今度ばかりは、自分の代理として自分のために感謝できればどんなに嬉しかったことか)

### 3.1.2.3. O, (that) の構文

- (14) O, that I could but call these dead to life! (1H6 47081) (この二人の死者をよみがえらせることはできぬものか!)

### 3.1.2.4. unless 構文

- (15) My eye's too quick, my heart o'erweens too much, unless my hand and strength could equal them. (3H6 32144) (おれの目はせっかちすぎるし、心は高慢すぎる、おれの手と力がそれに伴わないかぎり)

### 3.1.2.5. 独立した節で

- (16) O, I could hew up rocks and fight with flint (2H6 51024) (ああ、腹立ちまぎれに岩をたたき割り、石をたたきつぶしてやるか)
- (17) A heavier task could not have been imposed than I to speak my griefs unspeakable. (Err 11031) (言語に絶する私の悲しみのかずかずを口にするほどつらいことはありません)

## 3.2. BE ABLE TO

### 3.2.1. 単純現在形

BE ABLE TO の用例のうち単純現在形が占める割合は64.0%であり、欽定訳聖書の場合(40.0%)よりも高率である。実数においては、欽定訳聖書の1/3ではあるが、比率の高さは無視できないであろう。シェイクスピアにおける16例の単純現在形のうち、肯定形が10例、否定形が6例である。意味の上で CAN との住み分けが存在している可能性が考えられるが、意味論的な考



察は後で行なうので、ここでは、BE ABLE TO の単純現在形が現代英語から見るとやや特異と思われる言語環境で生じている例を見ておくことにする。

### 3.2.1.1. 同一文中に CAN と BE ABLE TO とが存在する場合

- (18) But your discretions better can persuade than I am able to instruct or teach (1H6 41158)  
(だが賢明なるおふたりのことだから、私からあれこれ教訓めいたことを言わなくてもおわかりいただけよう)

### 3.2.1.2. 仮定節+直説法帰結部

- (19) Why, man, if the river were dry, I am able to fill it with my tears (GV 23051) (川が干上がったら、おれの涙でいっぱいにしてやれるし)

### 3.2.1.3. 比較構文の中で

- (20) I am as able and as fit as thou to serve, and to deserve my mistress' grace (TA 21033) (おれだってあの人の好意を受けるだけの能力も資格もあんたに劣らずあるんだ)

### 3.2.2. 単純過去形

BE ABLE TO の用例のうち単純過去形は次の1例にすぎない。欽定訳聖書では31例もあるので、その違いは大きい。

- (21) Thou hast appointed justices of peace to call poor men before them about matters they were not able to answer. (2H6 47048) (それからきさまは治安判事なんてものをおき、貧乏人を呼び出しちゃあ到底答えられないようなことを尋問させやがって)

### 3.2.3. 仮定法過去

仮定法過去の用例が1例あった。欽定訳聖書では仮定法過去の例はない。

- (22) Would I were able to load him with his desert! (H5 37077) (彼の真価に対する賞賛の言葉はまだまだ足りない)

### 3.2.4. 法助動詞との共起

法助動詞との共起は4例あり、そのうち2例が CAN と共に用いられている。一般に、法助動詞との共起の場合は、言うまでもなく CAN の代用形にすぎないし、したがって出現する率も高いことが予想されるが、BE ABLE TO の用例全体から見た比率は15.4%にすぎない。欽定訳聖書の場合は、実数も多いし、比率も21.7%とやや高い。ここでは、すべての用例を載せておく。

シェイクスピアにおける CAN および BE ABLE TO について

- (23) Tomorrow, Caesar, I shall be furnished to inform you rightly both what by sea and land I can be able to front this present time. (AC 14078) (では、シーザー、現在の状況に対処して、海と陸とどれだけの兵力を動員できるか、明日になれば正確な数字が御報告できるだろう)
- (24) that balladmakers cannot be able to express it (WT 52024) (これはバラッド作者たちもとうてい表現できはしまい)
- (25) Methink the power that Edward hath in field should not be able to encounter mine (3H6 410004) (私にはエドワードが引き連れてきた兵力はわが軍に敵しうるものではないと思う)
- (26) I shall never be able to fight a blow (2H6 13221) (おれは決闘などとてもできない)

3.2.5. 非定形用法 (Non-finite forms)

ここで言う非定形用法とは、原形不定詞、TO 不定詞、現在分詞、HAVE+EN、BE の脱落などを意味するが、そのすべての用例があるわけではない。表5はシェイクスピア (Shak) と欽定訳聖書 (AV) との比較を表している。

表5：BE ABLE TO の非定形用法の分布

	Root Form	To-infinitive	Present Participle	HAVE+EN	Without-be Form
Shak	0	0	0	0	3
AV	10	0	0	1	2

この表で分かるように、欽定訳聖書では原形不定詞の例が圧倒的に多い。これは、(27)に例示するようにすべてが仮定法現在の用法である。

- (27) If he be able to fight with me, and to kill me, then will we be your servants (1 Sam. 17 : 9)  
(おれと勝負して勝ち、おれを打ち殺すなら、おれたちはおまえらの奴隷となる)

興味深いことに、シェイクスピアでは仮定法現在の用例は見当たらない。すでに見たように、シェイクスピアでは仮定法過去の BE ABLE TO が1例あり、さらに、仮定法の COULD の出現率は欽定訳聖書に比べて非常に高いのであるから、仮定法現在の例がないというのは注目すべきことであろう。

シェイクスピアにおける BE ABLE TO の非定形用法の3例は(28)–(30)に示すように being の脱落した分詞構文または後置修飾用法である。表5に示した欽定訳聖書の2例はいずれも being の脱落した分詞構文である。

- (28) for upon these taxations the clothiers all, not able to maintain the many to them 'longing, have put off the spinsters, carders, (H8 12031) (なにしろ今度の課税のため、織物業者はいずれも下請けの職人どもを食わせていけなくなり、紡ぎ職や梳き職などを解雇いたしました)
- (29) His treasons will sit blushing in his face, not able to endure the sight of day (R2 32047) (その光をまともにふり仰ぐことなどできず、やつの謀反は恥ずかしさに顔を赤らめるだけだ)
- (30) You have a father able to maintain you (3H6 33154) (娘を養うことぐらいはできる父親をお持ちなのだから)

## 4. 意味論的考察

### 4.1. CAN の意味について

#### 4.1.1. 現代英語における CAN

現代英語における CAN は次の3つの意味で用いられる<sup>(10)</sup>。

##### (i) 可能性

- (31) Even expert drivers can make mistakes.
- (32) Her performance was the best that could be hoped for.

この意味の場合には、一般に it is possible to~で言い換えることができる。たとえば、(31)は次のように言い換えることができる。

- (31a) It is possible for even expert drivers to make mistakes.

##### (ii) 能力

- (33) Can you remember where they live?
- (34) Magda could speak three languages by the age of six.

この意味の場合には、一般に be able to~で言い換えることができる。たとえば、(34)は次のように言い換えることができる。

- (34a) Magda was able to speak three languages by the age of six.

ただし、Quirk *et al.* (1985 : 222) の言うように、「能力」の意味は「可能性」の意味の特別な場合と把らえることもできるので、(i)と同様に it is possible to~で言い換えることも可能である。

シェイクスピアにおける CAN および BE ABLE TO について

- (35) a I could swim all the way across the lake.  
b It was possible for me to swim all the way across the lake.

(iii) 許可

この意味では MAY がふつうであるが、CAN はそれよりも形式ばらない意味を持っている。

- (36) Can we borrow these books from the library?  
(37) In those days only men could vote in elections.

この意味での CAN は、be allowed to～で言い換えることができる。

- (36a) Are we allowed to borrow these books from the library?

4.1.2. シェイクスピアにおける CAN

4.1.2.1. 能力の CAN

シェイクスピアにおいても、CAN の多くは今日と同じように「～することができる」という能力を表す意味に使われている。

- (38) The devil can cite Scripture for his purpose. (MV 13099) (悪魔でも自分の都合に合わせて聖書を引用できる)

4.1.2.2. 可能性の CAN

すでに、3.1.1.2. で挙げた it cannot be 「ありえない」という不可能を表す形がシェイクスピアでは多く使われている。

- (39) (= (5)) It cannot be: some villains of my court are of consent and sufferance in this (As 22002)

- (40) (= (6)) It cannot be this weak and writhled shrimp should strike such terror to his enemies. (1H6 23022)

この形は欽定訳聖書でも現代英語でもほとんど見ることはないもので、暫定的な言い方になるが、シェイクスピア独特の表現法と言ってもよいのではないだろうか。

その他にも可能性を表す CAN の例は多く見られる。それらが、否定文や疑問文に多いのは現代

英語と同様の傾向である。

- (41) He cannot be such a monster (Lr 12102) (彼がそういう人非人でありえようはずがない)  
(42) What can happen to me above this wretchedness? (H8 31121) (私にとって、これ以上のみじめなことがありますか)

#### 4.1.2.3. 許可の CAN

中尾 (1979: 201) では、許可の CAN は18世紀以降に使われるようになったとしているが、シェイクスピアの中に、この用法と判断できるものが少なくとも2例見つかっている。

- (43) Is it not hard, Nerrisa, that I cannot choose one nor refuse none? (MV 12022) (自分で選ぶことも断ることも許されないなんてひどいと思わない、ネリッサ?)  
(44) Here can I sit alone, unseen of any (GV 54004) (だれの目にも触れずに独り座っていてもいいのだ)

次の例もことばのやりとりの環境から言うと「許可の CAN」と解釈するのが妥当なように思われる。It may not be (それは許されないだろう) と言っておいてさらに、It cannot be と言うのであるから、さらに強い口調で不許可 (must not) を訴えていることになるだろう。

(45) Tranio: Let us entreat you stay till after dinner.

Petruccio: It may not be.

Gremio: Let me entreat you.

Petruccio: It cannot be.

Katherine: Let me entreat you.

Petruccio: I am content. (TShr 33072)

(夕食までいてほしいのだ／そうはいかないのだ／いてくれよ／そうはいかないのだ／いてくださいよ／ご好意はありがたく思うよ)

## 4.2. BE ABLE TO の意味について

### 4.2.1. 現代英語における BE ABLE TO

Quirk *et al.* (1985), Palmer (1979), Thomson & Martinet (1986<sup>4</sup>) を参考にして現代英語における BE ABLE TO の特徴をまとめてみると概略、次のようになる。

(i) CAN の代用形としての BE ABLE TO は、言うまでもないが、助動詞の後や完了形で用いる。

(46) Our baby will be able to walk in a few weeks.

(47) Since his accident he hasn't been able to leave the house.

(Thomson & Martinet 1986<sup>4</sup> : 135)

単に能力を表すだけならば、CAN と BE ABLE TO は互いに交換可能であり、その使い分けは気分次第であったり、redundancy を避ける場合のように文脈に支配されることもある。

(48) Can you/ Are you able to swim? (Thomson & Martinet 1986<sup>4</sup> : 135)

(ii) 肯定現在形の is/am/are able to は現在時点での実現性を表す。それに対して can は実現性を表すことはまれであり、たとえ、使われたとしても現在時点よりも未来の実現性についての言及となる。

(49) In this way we are able to carry out research and not simply to undertake consulting.  
(Palmer 1979 : 77)

(iii) 肯定過去形の was/were able to は過去に一回限りの行為が実現したことを表す。この場合、could は使えない。

(50) a. I ran after the bus, and was able to catch it.

b. \*I ran after the bus, and could catch it.

(Quirk *et al.* 1985 : 232)

(iv) 単に過去の能力を表すだけならば、could も was/were able to も使える。

(51) When I was young I could/was able to climb any tree in the forest. (Thomson & Martinet 1986<sup>4</sup> : 135)

(v) 感覚動詞の場合には、could と was/were able to との間には意味の差は見られない。

(52) I could/was able to see him through the window. (Thomson & Martinet 1986<sup>4</sup> : 135)

## シェイクスピアにおける CAN および BE ABLE TO について

(vi) 過去形の否定文では, could と was/were able to との間には意味の差は見られない。

(53) He read the message but he couldn't/wasn't able to understand it. (Thomson & Martinet 1986<sup>4</sup> : 135)

### 4.2.2. シェイクスピアにおける BE ABLE TO

シェイクスピアにおける BE ABLE TO と前節に述べた現代英語における BE ABLE TO との間には意味の差異はほとんど認められない。現在形では, CAN の代用形としての, 単に能力を表す BE ABLE TO の用例が多い。(54)は redundancy を避けるためのものであり, (55)は同等比較の関係で BE ABLE TO が用いられている。

(54) (= (18)) But your discretions better can persuade than I am able to instruct or teach (1H6 41158)

(55) (= (20)) I am as able and as fit as thou to serve, and to deserve my mistress' grace (TA 21033)

(56), (57)では, 能力の実現性がより強調されているように思われる。

(56) Henry is able to enrich his queen (1H6 57051) (ヘンリー陛下はご自分の力でお妃を富ましむるかた)

(57) None of you but is able to bear against the great Aufidius (おまえたちの一人一人が強敵オーフィディアスにひけをとらないのだ) (Cor 17078)

欽定訳聖書の現在形に多く見られた 'have the divine power' の意味を持つ BE ABLE TO は見当らなかった。

### 4.3. CAN BE ABLE TO の意味について

CAN BE ABLE TO は(58)~(60)のようにシェイクスピアでは2回, 欽定訳聖書では1回使われている。

(58) (= (23)) Tomorrow, Caesar, I shall be furnished to inform you rightly both what by sea and land I can be able to front this present time. (AC 14078)

(59) (= (24)) that balladmakers cannot be able to express it (WT 52024)

(60) (= (1)) And they (i. e., locusts) shall cover the face of the earth, that one cannot be able to

see the earth (Exod. 10 : 5)

もし、tautological で非文と見做されたのであれば、恐らくこの形は現存していないであろう。TERADA (1995 : 105) において、(6)にある one cannot be able to see the earth は次のように解釈できることを述べた。

one cannot be able to see the earth  $\equiv$  it is not possible that one has sufficient power or ability to see the earth

興味深いことは、CAN BE ABLE TO は否定辞または疑問詞と共起した例しか見つかっていないということである。Visser (1963-73 : 1738) には 8 例あるが、肯定の平叙文は 1 例もない。このことから言えることは、この用法の CAN は現代英語の「～でありうる」という推量・可能性の意味を持つものに当たるということである。つまり、能力の意味はなく、能力の意味は BE ABLE TO によって表現されているということになる。したがって、シェイクスピア時代の CAN BE ABLE TO は次のように解釈できることになる。

CAN BE ABLE TO = (否定辞または疑問詞と共起) 推量・可能性の CAN + 能力を表す BE ABLE TO

## 5. 結 論

シェイクスピアにおける CAN と BE ABLE TO の関係を欽定訳聖書と対比しながら考察を進めてきたわけであるが、ここで明らかになった点を箇条書きにしてみると次のようになる。

- (1) シェイクスピアにおける CAN および BE ABLE TO の分布は著作年代によって著しく増減するというような傾向は見られない。つまり、CAN および BE ABLE TO という狭い範囲では、著作年代による文体上の変化は顕著ではないということになる。作品間の CAN および BE ABLE TO の多寡は、作品の長さや作品の内容に依存しているものと判断できる。
- (2) シェイクスピアにおける CAN と BE ABLE TO の比率は 77 : 1 である。これに対して欽定訳聖書の場合は 3 : 1 であり、シェイクスピアにおいては、CAN が実数においても、比率においても圧倒的に多いことがわかる。シェイクスピアの作品が当時の口語を代表し、欽定訳聖書が当時の文語を代表しているのではないかという推測と重ね合わせてみると、特に、単純現在形および単純過去形の BE ABLE TO はどちらかという文語的なスタイルで比較的よく用いられ



たのではないかという推測が成り立つ。

- (3) CAN BE ABLE TO はシェイクスピアにおいては WT 52024 および AC 14078 に 2 回使われている。それに対して欽定訳聖書では 1 回使われている。その意味および統語的特性は、CAN BE ABLE TO = (否定辞または疑問詞と共起) 推量・可能性の CAN + 能力を表す BE ABLE TO となる。
- (4) 仮定法の COULD の出現率は、欽定訳聖書では COULD 全体の 9.9% であるのに対してシェイクスピアでは 60.8% と非常に高い率である。シェイクスピアが微妙な意味を表現するために仮定法の COULD を多用したものと思われる。
- (5) BE ABLE TO の実数については、シェイクスピアと欽定訳聖書とでは大きな隔たりがあるものの、BE ABLE TO 全体に対する単純現在形と単純過去形を合わせたものの比率はシェイクスピアが 72.0%、欽定訳聖書が 67.0% とどちらも高い比率を示している。欽定訳聖書の場合には、‘have the divine power’ という意味を持つ BE ABLE TO が多いのであるが、シェイクスピアの場合にはこの意味を持つ用例はない。シェイクスピアの場合は、現代英語における BE ABLE TO と同じ意味を持つものが多く、むしろ文体上の理由で CAN の代わりに BE ABLE TO を用いたと思われるものが多い。
- (6) It cannot be は欽定訳聖書でも現代英語でもほとんど見かけないもので、シェイクスピアの文体の特徴のひとつと言えるであろう。
- (7) 許可の CAN は 18 世紀以降の用法であると一般には言われているが、シェイクスピアの中に、この用法と判断できるものが少なくとも 2 例あることがわかった。

#### 注

- (1) W. Stanley and G. Taylor (eds.) (1988) は、次の 4 つの作品を他の作家との共作としている。*Timon of Athens* (1604) は Thomas Middleton と、*Pericles* (1608) は George Wilkins と、*Henry VIII (All is True)* (1613) および最後の作とされている *The Noble Kinsmen* (1613) は John Fletcher との共作であるとしている。
- (2) 調査した作品とその略記表は以下の通りである。
- |      |   |
|------|---|
| 2H6  | <i>The Second Part of King Henry VI</i> |
| 3H6  | <i>The Third Part of King Henry VI</i>  |
| Err  | <i>The Comedy of Errors</i>             |
| 1H6  | <i>The First Part of King Henry VI</i>  |
| Ven  | <i>Venus and Adonis</i>                 |
| R3   | <i>King Richard III</i>                 |
| GV   | <i>The Two Gentlemen of Verona</i>      |
| Lucr | <i>The Rape of Lucrece</i>              |
| TShr | <i>The Taming of the Shrew</i>          |
| TA   | <i>Titus Andronicus</i>                 |
| MND  | <i>A Midsummer Night's Dream</i>        |

R2	<i>King Richard II</i>
LLL	<i>Love's Labor's Lost</i>
RJ	<i>Romeo and Juliet</i>
John	<i>King John</i>
MV	<i>The Merchant of Venice</i>
1H4	<i>The First Part of King Henry IV</i>
2H4	<i>The Second Part of King Henry IV</i>
Ado	<i>Much Ado about Nothing</i>
As	<i>As You Like It</i>
H5	<i>King Henry V</i>
JC	<i>Julius Caesar</i>
MWW	<i>The Merry Wives of Windsor</i>
TN	<i>Twelfth Night</i>
Ham	<i>Hamlet</i>
All	<i>All's Well That Ends Well</i>
TCr	<i>Troilus and Cressida</i>
Oth	<i>Othello</i>
MM	<i>Measure for Measure</i>
Lr	<i>King Lear</i>
Mac	<i>Macbeth</i>
AC	<i>Antony and Cleopatra</i>
Tim	<i>Timon of Athens</i>
Cor	<i>Coriolanus</i>
Per	<i>Pericles</i>
Cym	<i>Cymbeline</i>
WT	<i>The Winter's Tale</i>
Tem	<i>The Tempest</i>
H8	<i>King Henry VIII</i>
TNK	<i>The Two Noble Kinsmen</i>

- (3) 聖書の日本語は『新改訳聖書』(1970) (日本聖書刊行会) を用いた。
- (4) 推定著作年代は主として Wells, S. and G. Taylor (eds.) (1988) を参考にした。
- (5) Terada (1995) による。
- (6) Palmer (1979 : 77) は、現代英語の資料では BE ABLE TO の出現率は CAN に比べて、文語資料に現われる率のほうが口語資料に現われる率よりも圧倒的に高いと述べている。
- (7) (WT 52024) は Visser (1963-73) などによって知られていたが、(AC 14078) は今まで知られていなかったものである。なお、引用する際の表示方法は、たとえば、(WT 52024) は *The Winter's Tale* の 5 幕 2 場 24 行を表し、引用の始まりの行数を示している。
- (8) 日本語は主として小田島雄志訳 (白水社) を参考にしたが、論点をはっきりするように私訳したこともある。
- (9) N. F. Blake (1983) は、エリザベス朝時代には語形変化の衰退に伴って假定法が衰退しつつあったが、それでも假定法は活気があって便利な形だったので、今日よりもはるかに広く使われていたと述べている。
- (10) Visser (1963-73 : §1630) にも詳しい言及がある。

参考文献

- Blake, N. F. (1983) *Shakespeare's Language: An Introduction*, Macmillan, London
- 中尾俊夫 (1979) 『英語発達史』篠崎書林, 東京
- Palmer, F. R. (1979) *Modality and the English Modals*, Longman, London
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London
- Terada, M. (1995) BE ABLE TO in the Authorized Version of the Bible, 聖学院論叢 第7巻 第2号 pp. 91-107
- Thomson & Martinet (1986<sup>4</sup>) *A Practical English Grammar*, Oxford University Press, Oxford
- Visser, F. Th. (1963-73) *An Historical Syntax of the English Language*, vol. 3, E. J. Brill, Leiden
- Warner, A. R. (1993) *English Auxiliaries*, Cambridge University Press, Cambridge
- Wells, S. and G. Taylor (eds.) (1988) *William Shakespeare: The Complete Works*, Oxford University Press, Oxford